学習院大学史料館

ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.32

発行日 ● 平成28年(2016)10月1日

もくじ

ごあいさつ…… 1
うつほ物語　絵入版本、桜地流水文蒔絵双六盤 …… 2
平家公達草紙…… 3
源氏物語　須磨・松風図屏風 …… 4
歌川芳幾画　今様擬源氏 …… 6
三十六歌仙額…… 7
山東京伝画　桜下遊女図 …… 8
文正草子絵巻、銀製雛道具…… 9
住吉物語貼交屏風……10
貝桶形流水菊花葵文ボンボニエール……12

小野小町図
（内膳司濱島家文書「三十六歌仙絵」上巻より）

ごあいさつ

学習院大学史料館では平成28年10月１日～12月10日に「君恋ふるこころ―恋に落ちる日本美術―」というテーマで展覧会を、そしてその関連講座として、学習院大学文学部の佐野みどり教授による第81回学習院大学史料館講座「王朝物語と絵画」を10月８日（土）に開催致します。本ミュージアムレターをご覧頂ければ、多くの日本美術が「恋」をテーマとして、絵画や工芸品にそのストーリーが展開されていることがおわかりになると思います。また、当展覧会では、平成27年度に当館所蔵となった「源氏物語　須磨・松風図屏風」や、新たに寄託されることとなった勧修寺所蔵「三十六歌仙額」を初めて公開いたします。その他、史料館展示室では、多くのゆかりのものが展示され、関連講座では興味深いお話しがあり、ご参加の皆様方に楽んで頂けることと思います。皆様にはこれらを通じて、史料館員達の熱い思いや活動を身近に感じて頂ければ幸いです。

最後になりましたが、この展覧会および史料館講座開催にご尽力、ご協力いただきました関係各位に心よりお礼を申し上げます。

（館長　上田隆穂）

君恋（きみこ）ふるこころ
―恋におちる日本美術―

当館は昭和50年（1975）の開館以来、古文書や華族関係の資料を中心に幅広いジャンルの資料を収蔵するに至っています。なかでも、日本の美術品に関しては、絵画や工芸品をはじめとして年々その数を増やしつつあります。

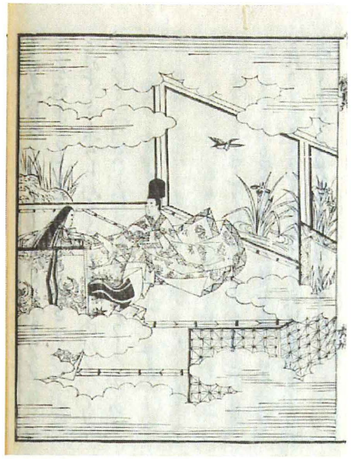
そこでこの度、当館では日本美術をメインとした展覧会を開催することになりました。今回は特に、「恋」というテーマを定め、絵画や工芸品に表された恋の物語を紹介する展覧会となっております。いにしえより、先人たちは物語や和歌において、必ずと言ってよいほど恋を語っています。情熱的な恋、悲しい恋、待ちわびる恋…恋には色々な形があり、それは現代の我々にも十分に共感出来るものでしょう。本展では、そうした先人たちの「恋」をテーマに、学習院が所蔵する絵巻や屏風、浮世絵、奈良絵本といった様々な日本の美術品を展示いたします。『源氏物語』や『住吉物語』など日本を代表する古典文学の絵画から、結婚を祝したボンボニエールまで、幅広い年代・種類の作品を取り揃えております。

「君恋ふるこころ」とは、和歌によく詠まれた言葉で「あなたを愛しく想う気持ち」という意味です。華やかな日本人の恋と美術をお楽しみ下さい。

（助教　柳澤恵理子）

うつほ物語 絵入版本

日本語日本文学科蔵
文化３年（1806）
全30冊
縦26.5㎝　横18.5㎝


「俊蔭上」藤原氏の若小君（後の兼雅）と俊蔭の娘の逢瀬

『うつほ物語』は、現存最古（10世紀）の長編物語である。琴の物語だといわれることが多いが、それだけではなく、前半には二十名近くの男性から求婚されるあて宮求婚譚があり、後半には源氏と藤原氏の立太子をめぐる政治争いがある。『うつほ物語』には善本がなく、巻序が乱れていたが、延宝５年（1677）になって、整板本全巻三十冊が刊行され、初めて全巻を読めるようになった。これはかなり売れたらしく、百余年後の文化３年（1806）に延宝５年開板本の補刻本が出版された。

今回公開されるのはこの文化３年補刻本である。刊行時には巻序は整理されていたものの、本文にはいまだ読みにくい箇所が残っていた。そのために本居宣長をはじめとした近世の国学者が版本に注を書き入れた。

当該本の書誌情報は以下の通りである。外題は、表紙左肩に縦19.9㎝×横3.3㎝の無枠題簽に、上から半分までに「うつほ物語」、半分から下は二行書きで、上段右側に巻名、上段左側は空白、下段右側に枠付きで今板本の文字と巻順、下段左側に古本の文字と巻順が印刷される。内題はない。表紙は、紺色の無地厚紙で楮紙。表紙に虫つくろいが行なわれた形跡がある。装丁は大四半本で五つ穴の袋綴。料紙は楮紙打紙で、美本である。版式は単辺（縦20.0㎝×横16.0㎝）、無界で半葉十一行。句点を付す。本文は漢字仮名交じり。書入は、漢字・仮名・片仮名を、墨・朱墨・藍墨で記す。また、当該本には、「俊蔭上・下」巻、「藤原の君」巻、「忠こそ」巻、「梅の花笠」巻の五冊にのみ書入れがあり、「俊蔭上・下」二冊の最後に、田中道麻呂、平春海、源弘綱の名前が見える。これは、田中道麻呂、村田春海、佐々木弘綱の書入れを書写したということである。当該本の書入れは、本に直書きしたものと付箋で貼ったものの二種類があり、付箋で貼ったものは、三人の国学者の書入れを書写した人物だと考えられる。このことから、当該本の書き入れは、近世末期から近代初期のものであろうと推測できる。

（日本語日本文学科非常勤講師　武藤那賀子）

桜地流水文蒔絵双六盤

学芸員課程蔵
江戸時代
縦27.8㎝　横40.0㎝　高19.5㎝

双六の名前は、一から六までの数を表す点が刻まれたさいころ二つを振ってコマを進める遊び方に基づいている。双六には、出た目に応じて、紙面上の振り出しから上がりまで駒を進める絵双六と、木製の盤面上の区画にコマを進める盤双六とがある。ここで紹介する盤双六の歴史は古く、奈良の正倉院にも聖武天皇ゆかりの宝物が伝えられている。双六は、広く人々に楽しまれたが、『平家物語』巻一に、白河法皇が「賀茂河の水、双六の賽、山法師、是ぞわが心にかなわぬもの」と嘆じた逸話が伝えられるように、盤双六の遊び方は、さいころの目の偶然性によるもので、賭け事的な側面をも持ちあわせたため、度々禁じられた。平安時代中期に成立した『うつほ物語』の「藤原の君」の帖でも、ばくち打ちが「双六の主」として記されている。

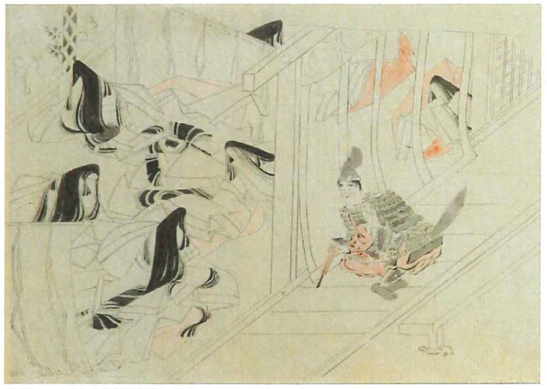
江戸時代、双六盤は将棋盤・碁盤と並んで婚礼調度の一つとされ、蒔絵を施した華やかな双六盤が大名調度として各地に伝えられている。桜材を内刳りしたこの双六盤は、盤面に設けられた区画と梅鉢文を象牙の象嵌で表し、側面には流水に沢瀉・葵・楓文、左右に刳られた笠形の手掛かりには尾長亀の吉祥文が華やかに蒔絵されている。盤面と共に、二つのさいころ、さいころを振り出すための竹製の双六筒、唐木と象牙で作られた黒白各十五個の双六子が錦の袋に納められて伴っている。

盤双六の遊び方には、「折り葉」・「追回し」・「つみかえ」・「本双六」などがあった。この双六盤上でも白熱した遊びが展開されたのであろうか、盤面には無数に弧状の打突痕が確認され、その弧が双六筒の円周と一致し、サイコロを籠めた双六筒を強く盤面に打ち付けて振り出していた様子がうかがえる。

（EF共同研究員　田中　潤）

平家公達草紙

哲学科蔵
江戸時代末期～明治時代
縦29.0㎝　全長292.3㎝


挿図１　「平家公達草紙」部分　哲学科蔵

挿図２　「平家公達草紙」部分　東京国立博物館蔵
image:TNM Image Archives

「平家公達草紙」は、平安末期に栄華を極めた平家一門の宮廷生活の一部を描いた白描の絵巻である。内容の異なる作例が複数現存しており、A. 福岡市美術館松永コレクション本、B. 東京国立博物館本・金刀比羅宮本・早稲田大学図書館本・國學院大學図書館本、C. 宮内庁書陵部本など、現在三つの系統が確認されている。白描の小絵巻が流行した南北朝期頃の制作と考えられるが、『平家物語』を典拠としているわけではなく、また、上記の作例の殆どが江戸時代以降の模本であるため、原本の全容は明らかではない。基本的に詞書とそれに対応する絵とで構成されているものの、詞書のみの作例もいくつか存在する。

哲学科蔵「平家公達草紙」（以下、本巻）は、まくりの白描絵巻で、「かたのまもり」「建春門院の面影」「重衡とその想い人達」の段の絵三図で構成されており、詞書はない。これらはすべてB系統の作例に見られる場面であるが、天保３年（1832）に狩野養信（1796～1846）が模写したという同じB系統の東京国立博物館本に比べると、未完成な部分が多い。しかしながら、巻末に位置する「重衡とその想い人達」（挿図１）に関しては、強弱のある墨線で丁寧に描かれている点に注目される。この場面は、寿永２年（1183）平家都落ちの際に、平家一門の中でも美男とうたわれた重衡が、親しくしていた女房達へ暇乞いに参るという悲しい恋の別れを絵画化したもので、鎧姿の重衡が御簾越しに別れを告げる様子が描かれている。東京国立博物館本の同場面（挿図２）と比べると、重衡の直垂や女房達の袴が淡い朱色で着彩されており、また、モチーフの描き方も多少異なっている。

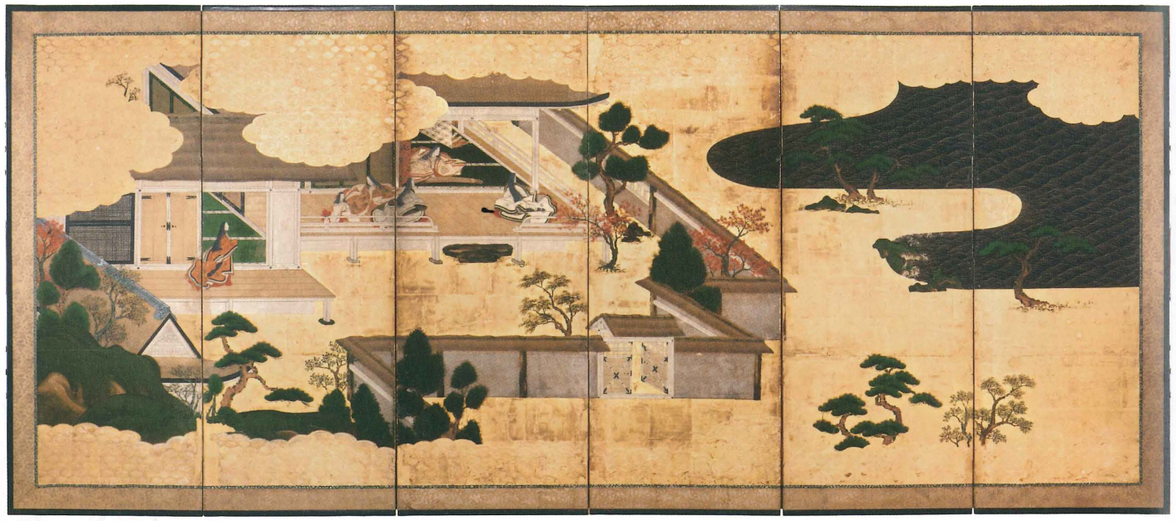
ところで、本巻の表紙には「平家物語　冷泉為恭画」と記されている。冷泉為恭（1823～1864）は幕末期の復古やまと絵派の絵師で、数多くの古絵巻・古画を模写しており、香川県・金刀比羅宮蔵「平家公達草紙」は為恭自身の模写本として知られている。また、早稲田大学図書館本は、西田直養（1793～1865）が為恭から借りた「平家公達草紙」を模写したものだという。直養が借りたものが、為恭筆本であるかは定かではないものの、為恭は「平家公達草紙」を所持し、自身も模写を行っていたのである。本巻の絵師については、今後、金刀比羅宮本とも比較しながら検討する必要があるだろう。

なお、本巻見返しには明治期の日本画家・和田貫水（1867～1945）の蔵書印が押されていることから、彼の旧蔵品であったことが窺える。貫水は明治30年（1897）に春日右方絵所預に任ぜられた絵師で、やまと絵を守住貫魚（1809～1892）などに学んでいる。

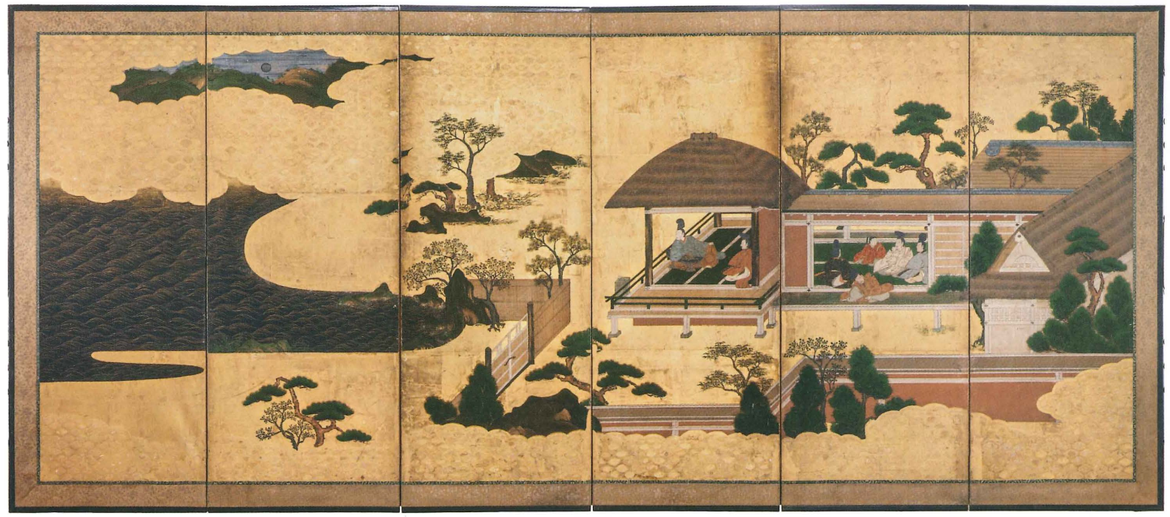
（助教　柳澤恵理子）

源氏物語　須磨・松風図屏風

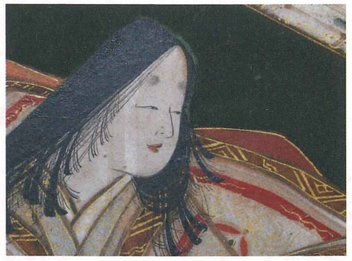
学習院大学史料館蔵
六曲一双
江戸時代（17 世紀末～ 18 世紀前半）
（各）横 276.8cm　高 123.0cm



左隻



右隻



挿図 1

挿図 2

『源氏物語』の須磨帖と松風帖からそれぞれ一場面を選んだ、いわゆる源氏絵屏風である。胡粉（ごふん）を文様の形に盛り上げ、その上に金箔を貼付した装飾金雲を大きく棚引かせ、右隻には光源氏の須磨での侘び住まいの様子、左隻には大堰（おおい）の山荘に住む明石の君一家の様子を近接的に描く。左右隻とも屋台（建造物）を大きく展開し、あたかも視線を導く矢印のような働きを担わせ、海景が左右隻の空間を連続させる。須磨の源氏が都を思い眺める視線の先に、それよりもずっと物語の時間軸を進めた時空の、明石の君が琴を奏でつつ源氏との将来を思い侘びているのである。この屏風の趣向は、『源氏物語』の全体像を思い浮かべつ、左右隻の画面を有機的に関連付け楽しむところにある。

制作期は、人物の面貌（めんぼう）に見られる気品や装飾金雲のおとなしさ、装束の文様描写など17世紀末から18世紀前半と考えるのが妥当であろう（挿図１，２，３）。

人物の面貌や樹木表現などに見られる描写の特性は、やまと絵とも狩野派とも判別しがたい両側面を持っている。おそらくこの画家は画技のトレーニングを狩野派で始めたと思われるが、さりとて狩野派正系の画家グループに入るほどには狩野派的様式特性を身に着けなかったのではないだろうか。

本作の特質は、左右隻で〈源氏と明石の君の物語〉を作り出すところにあり、そこに近世における源氏読みの在り方を窺うことが出来る。だが、問題となるのは、右隻の季節が曖昧であることだ。近世の源氏絵における須磨帖からの場面選択は、ほとんどが次の二つのいずれかである。一つは秋、海の見える廊に出て都を思い眺めやる源氏を描くもの（たとえば福岡市美術館の土佐光起筆「源氏物語図屏風」）、もう一つは春の若木の桜が咲く庭を見て感慨にふける源氏を描くものである（たとえばサウスオーストラリア美術館の須磨明石澪標（みおつくし）図屏風）。左隻が紅葉した楓を配していることを勘案するならば、春秋を取りそろえた一双屏風ということで、右隻は春の景が本来相応しい。だが、右隻に桜は見当たらず、といって秋の紅葉や秋草もなく、季節の標識が不明確で曖昧である。おそらくこの画家は、須磨の情景は秋の景であることが先入観として染みついており、春の桜を描くことにためらいがあったのではないだろうか。

『源氏物語』に材をとった謡曲は十曲を数え、近世における『源氏物語』享受、とりわけ造形化に大きな影響を与えた。サウスオーストラリア美術館本は、謡曲「須磨源氏」と「住吉詣」を〈世界〉とするものである。本作もまた、このような源氏読みを基層に、源氏と明石の君物語＋春秋の趣向という構想で作られた一双屏風を手本としつつも、自己の不十分な知識や判断によって、本文との距離が出てしまった作例といえるだろう。だが、描写の細部を観察すると、緑青（ろくしょう）や群青といった顔料（岩絵の具）は輝きを持っており、装束の文様描写や人物の面貌、樹木や波の線など、線描も強くしなやかである（挿図４）。丁寧な描写、上質な顔料、しかし金はやや純度が低いといった特徴は、本作の注文主の階層をある程度推測させる。123.0 cmという中屏風の仕立てからも、注文主は仰々しい身分であるというよりも市井（しせい）の富者であり、婚礼調度として作らせたものであるかもしれない。

（文学部教授・史料館研究員　佐野みどり）

挿図 3

挿図 4

歌川芳幾画　今様擬源氏

日本語日本文学科蔵
文久３年～慶応２年（1863～66）
大判錦絵 54 図（最終図のみ欠・目録１図）
（画帖・各図）縦 36.8㎝　横 24.0㎝

光源氏の恋模様を描きだした、世界最古の長編小説とされる『源氏物語』。上流階級に享受されてきた優雅な物語は、江戸時代には印刷技術の発展や寺子屋の普及による識字率の向上を背景に、絵入りの梗概書などが浸透し、庶民にも身近な存在となった。浮世絵版画でも五十四の巻に取材した揃物のほか、「夕顔」「若菜」など人気の高い場面のみを描く例も確認でき、ある時は原拠の時代設定をそのままに、ある時は江戸時代風に置き換える「やつし」や「見立」の手法を用いて、多様な作品が生み出された。

歌川芳幾（1833～1904）が幕末に手がけた「今様擬源氏」は、『源氏物語』の各巻から連想される人物を描く揃物で、目録を加えた計五十五図が刊行された。図の上部は画帖を模した四つの枠組みを配する形式で統一され、右よりシリーズ名、巻名と作中に登場する著名な和歌、見立てられる人物に関する詞書が記載される。原則として右枠に葵の葉と巻名に該当する源氏香、中央部にその巻を象徴する事物を配し、風雅な雰囲気を醸し出す工夫がなされている。一方で、肝心の人物が『源氏物語』とかけ離れたイメージを持つ場合が多いのも、この揃物の面白いところだ。例えば光源氏が都を離れ蟄居する「須磨」の図では、源氏の武将の熊谷次郎直実と討ち取った平家の公達、敦盛の首と鎧が描かれる（挿図１）。須磨という地名から一ノ谷の合戦における「敦盛の最期」の逸話を導き出すという、武者絵を得意とした芳幾らしい一図である。実はシリーズ名の「今様」は当世風、「擬」は別の物に見立てるという意味がある。原拠の『源氏物語』を江戸時代風にアレンジするのがこの揃物の眼目であり、熊谷のような実在の武将のほか、流行の歌舞伎や小説など当時の庶民にお馴染の逸話を結び付け、その落差を楽しんだのである。

今回の展示にちなみ「恋」の逸話を描く例を挙げてみよう。桜の宴の後で光源氏が朧月夜の君と出会う「花の宴」の場合、薄雪姫が清水寺の花見で園部左衛門を見初める初々しい姿に見立てられている（歌舞伎「新薄雪物語」、挿図２）。また「鶯の初音知らせよ」の歌から巻名がつけられた「初音」に関しては、鶯を助けた縁で長者の娘梅が枝が佐々木源之助に惹かれるという、歌舞伎「鶯墳長柄故」の一場面を巧みに導き出しており、二人が視線を交わす様も微笑ましい（挿図３）。現代の我々には読み解きが難しい図もあるが、時空を超えた結びつきを楽しむ豊かな江戸時代の感覚を、じっくりと味わうことができるシリーズである。

（日本語日本文学科非常勤講師　藤澤　茜）

挿図１　須磨（熊谷次郎直実）

挿図２　花の宴（奴妻平・園部の左衛門・うすゆき姫）

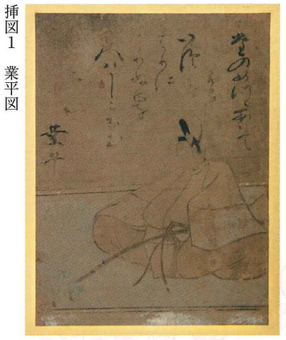
挿図３　はつ音（梅ヶ枝姫・佐々木源之助高政）

三十六歌仙額

勧修寺蔵　学習院大学史料館保管
江戸時代
全６面（各）
縦 44.4㎝　横 164.0㎝

右から業平、遍照、素性法師、紀友則、猿丸、小野小町

挿図２　小野小町図



挿図１　業平図

三十六歌仙とは、平安時代の歌人・藤原公任（966～1041）が『万葉集』や『古今和歌集』などの歌集から選んだ、三十六人の優れた歌人たちのことである。平安時代後期から鎌倉時代にかけて流行し、歌仙伝や、装飾を凝らした美しい料紙に三十六人の和歌を書写した「三十六人家集」（京都・本願寺蔵）などが作られた。歌とともにその歌仙の姿を描く「三十六歌仙絵」の出現は鎌倉時代になってからで、旧秋田藩主の佐竹家に伝来した「佐竹本三十六歌仙絵」（出光美術館ほか）はその代表作である。

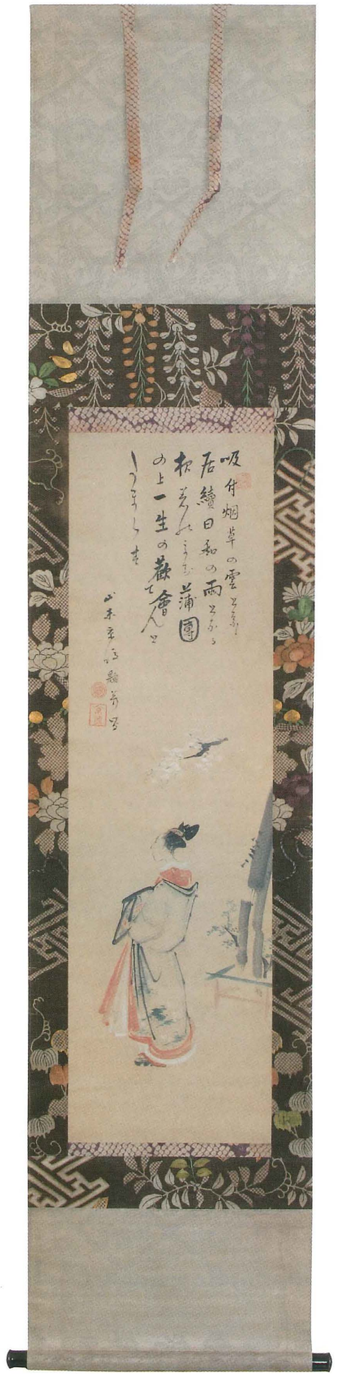
巻物仕立ての作例が多い歌仙絵であるが、室町時代になると、扁額という形となって登場する。人々の心に響く和歌が神仏の心を慰めるという思想の結びつきにより、扁額に歌仙の絵を描いて寺社に奉納することが室町頃盛んに行われたようである。京都・勧修寺が所蔵する「三十六歌仙額」（以下、勧修寺本）も、その一つであろう。六面の額に公任撰の三十六歌仙を描いた色紙がそれぞれ六枚ずつ貼り付けられたものである。勧修寺本が収められていた外箱の箱書には「勧修寺八幡宮寶物歌仙」とあることから、元は勧修寺の鎮守社であった八幡宮の宝物であったことが分かる。長年額として懸けられていたため、全体的に痛みが激しいものの、各歌仙の顔部分や彩色はかろうじて残っている。全体を通して丸みを帯びた面長の顔立ちで、顎が長く、額の部分が丸く突き出しているのが特徴で、歌仙一人一人の顔がしっかりと描き分けられている（挿図１）。一方で、素性法師や坂上是則など、一部の歌仙に関しては、丸顔で顎が短く、他の歌仙たちとは異なる特徴を持っており、また別の絵師の手を思わせよう。歌仙が身に着けている袴や袍部分は、やや誇張されたようなふくらみを持っており、女流歌人に関しては裳がまるで扇のように広がっているが（挿図２）、これは白描の歌仙絵などにも見られる特徴である。

なお、かすかであるが、何人かの歌仙の装束に「コン」「アサ」「エン」といった文字が記されている。これは著色の指示を表したもので、「コン」は紺色、「アサ」は浅葱色、「エン」は臙脂色を指していると考えられる。このような色の指示は、例えば原本と共に複数の模本が存在している「太平記絵巻」にも見られるもので、分業で制作していたことを思わせる。三十六枚という枚数から、勧修寺本の制作にも複数の画工が関わっていた可能性があろう。

（助教　柳澤恵理子）

山東京伝画　桜下遊女図

学芸員課程蔵
江戸時代後期
縦 171.5cm　横 40.5cm



きりりと高く髷を結い、着物の裾をからげた遊女が、桜花の下に人待ち顔で足を止めている。松のあしらわれた打掛と前帯には抑揚のある墨線を施し、紅白の掛下は色筆で勢いよく表されるが、ほっそりとした首や細面の顔が穏やかな雰囲気を作り出している。打掛は淡い緑と薄墨で立体感が出され、朱と緑の対比や濃淡によって色数の少なさを感じさせない。画面右に桜の幹が太い墨線で表されるが、遊女の頭上に差し掛かる枝にはつながらず、桜花はぽっかりと浮かぶ雲のようだ。桜花と遊女との組み合わせは、江戸吉原の典型的な図様として需要があり、多くの作品が描かれた。

本作のように斜め後ろから見る遊女の姿は、葛飾北斎（1760～1849）も描いている。北斎の絵に京伝が賛をした作品は多く、本作と同じ「吸付煙草」で始まる京伝の賛と、北斎の描く遊女図との組み合わせは、キヨッソーネ東洋美術館所蔵の扇面「桜花花魁図」など三点が確認されている。いずれも享和２年～文化２年（1802～1805）年頃の制作で、人気のほどがうかがえる。

山東京伝（1761～1816）は戯作者として名高いが、もとは浮世絵師で、15歳で北尾重政（1739～1820）に入門すると、政演と号して戯作本の挿絵を描いていた。20代からは山東京伝の名で原作挿絵も手掛ける自作自画の黄表紙を次々に刊行し、人気を博した。遊里を扱う作品も多く、遊女を妻としたことでも知られる。寛政５年（1793）に煙草入れの店を開くと、煙草用具だけでなく、自画賛の扇なども販売していた。「吸付煙草」で始まる賛と、画中の遊女。本作はいかにも山東京伝らしい一幅だといえよう。

（リサーチ・アシスタント　戸矢浩子）

吸付烟草の雲となり／居續日和の雨となる／夜着のうち蒲團／の上 一生の歡に會むと／しづまらず／山東京傳題并寫

「吸付烟草」は、遊女がくわえて息で火をつけ、すぐに吸えるようにしたキセル。「居續」（妓楼で遊び続ける）、「夜着」、「蒲團」とともに、遊郭を連想させる言葉である。「一生の歡に會むと」は、『和漢朗詠集』（下・遊女）に「舟の中、波の上で遊女と契りを交わすのも、一生の歡びであることに変わりはない（舟中浪上　一生之歡會是同）」とあるのを典拠とする。「しづまらず」は、寝静まることがない、また衰えのないことを指すのであろう。なお幕末の考証家 石塚豊芥子の著『戯作者撰集』には、式亭三馬所蔵の貼交屏風にあった京伝の詠としてこの賛を載せるが、その末尾は「一生の歡會　代金三分（遊女とあそぶための費用）」とあり、本品との異同が窺える。ただいずれにせよ、吉原の遊女を二度も妻に迎えた京伝の生き様を伝えるにふさわしい作品であるといえるだろう。

（客員研究員　中嶋　諒）

文正草子絵巻

哲学科蔵（行徳家旧蔵本）
江戸時代（17世紀後半～末頃）
縦 34.4cm　全長 1332.2cm

下巻　第一段絵部分

「文正草子」は御伽草子の代表的な物語で、奈良絵本の作例では寛永８年（1631）の奥付を有する筑波大学本をさきがけに、主に江戸時代前期から中後期にかけて多く確認される。鹿島大宮司に仕えた雑色の男（文正）が、職を失うも塩焼きとして大長者となる「立身出世」のあらすじは、正月の吉書として大いに愛好された。また文正が鹿島大明神に祈って授かった二人の娘が、帝や関白という身分ある男性と良縁を結ぶ下りは、婚礼などの祝儀物にも好まれた。

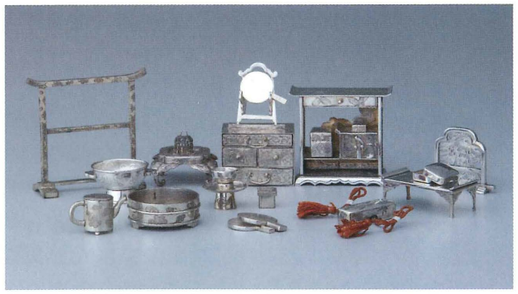
哲学科所蔵本は文正草子の下巻部分にあたる絵巻で、文正の姉娘に恋をする二位中将殿が紅葉重ねの薄葉に歌を認める場面から始まる。詞書の「君ゆへにまよひ来にけるみちのくの　しのふ心をあわれとおもへ」の歌は、岡田啓助氏が原文に近い文体だと指摘する、長尾平兵衛版『ふんしやうのさうし』（寛文４年（1664）刊）の系統をひくものと思われる。保存状態もよく、金泥を多用した華麗な彩色と緻密な線描が印象的である。明星大学所蔵の『ふんしやう』絵巻（紙本着色三巻本・江戸時代前期）や茨城県立歴史館本「文正草子屏風」（六曲一双・江戸時代）などが近しい作例として指摘される。

中でも圧巻なのは、二位中将が身分を隠し巧みな口上や美しい管絃で文正一家と親しくなり、ついには姉娘と契りを結ぶ一連の場面である。突然の風により巻き上がる御簾のしなやかな表現、姫君たちの華やかな衣装、唐絵とやまと絵を描き分けた調度品の見事さなど、細部にわたる描写がここ一番の「恋の場面」を一層盛り上げる。御簾がまくれて美女の姿を垣間見るといった展開は、『源氏物語』（「若菜上」）や『浄瑠璃物語』とも共通するドラマティックな演出である。「文正草子」が嫁入り道具にふさわしい主題でもあることから、こういった「恋」の場面がとりわけ生き生きと描かれるのであろう。

（人文科学研究科美術史学専攻非常勤講師・國學院大學教授　藤澤　紫）

銀製雛道具

山階鳥類研究所蔵　学習院大学史料館保管
江戸時代後期～明治時代



（最小、白粉箱）縦 0.8cm　横 0.9cm　高 0.8cm
（最大、衣桁）幅 4.7cm　奥行 1.9cm　高 5.1cm

平安時代に高貴な姫君たちが行っていた雛遊び。『源氏物語』の若紫や紅葉賀では、紫の上が雛（人形）を源氏に見立て遊ぶ様子や、源氏とともに人形の御殿を並べる様子が描かれ、『枕草紙』では、雛の調度が“うつくしきもの”として挙げられる。

日本には古代から雛に纏わる信仰が存在し、一方、中国から伝来したものとして、宮中では三月の上巳（節句）の日に、曲水の宴や桃酒を飲み穢れを祓う行事なども行われていた。江戸時代に入ると、こうした流れが相まって、三月三日に雛を飾る慣習が民間に広まっていった。現在のような、有職故実にならった雛人形や貴族の婚礼調度に擬えた揃いの調度類が作られるようになったのも、この頃である。雛人形や雛道具、それらで遊ぶ子供たちの姿や各地に立つ雛市の様子は、当時の浮世絵や絵草紙・名所案内などに度々登場する。本物の婚礼調度そのままに美しく精巧に作られた雛道具は、娘の幸せな結婚を願う親からの祝福が込められた造り物として、また、遊びや風習を通し少女たちが自然に恋や結婚について意識するための装置として、時代を超えて受け継がれていく。調度類は多くは漆工であるが、なかには金銀玉を使用したものも制作され、その極めて小さいながらも贅を凝らした造りには、度々禁令が出されるほどであった。なかでも銀製雛道具は、近衛家、鍋島家、三井家など明治期に華族となった家や、和菓子の老舗虎屋など、極限られた家にのみ現存が確認されている。制作時期はいずれも江戸後期から明治期にかけてとされるが、この精緻な銀細工の制作や販売を誰がどこで行ったのかは、未だ謎とされている。

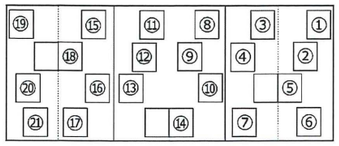
展示の銀製雛道具は、旧皇族の山階芳麿侯爵とその妻寿賀子の邸に旧蔵されていたものの一部。寿賀子は、明治37年（1904）伯爵酒井忠道の二女として生まれ、女子学習院卒業後の大正14年（1925）に芳麿に嫁いだ人物である。

（学芸員　吉廣さやか）

住吉物語貼交屏風

学習院大学史料館蔵
六曲一隻
江戸時代前期
横 303.6㎝　高 163.5㎝

奈良絵本『住吉物語』の絵の部分のみを切り出し、縦163.5㎝×横303.6㎝の屏風に貼ったものである。物語の流れに沿って、各絵に番号を付した図を掲げる。



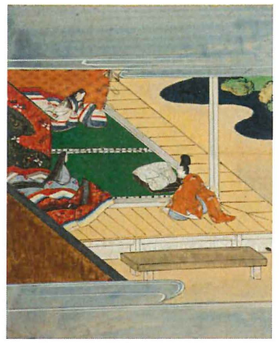
全二十一場面を描いた絵の寸法は、ほとんどのものが縦28.2～28.5㎝×横22.8㎝～23.0㎝だが、⑤のみ、縦29.2㎝×横23.5㎝であることから、元の冊子の大きさはこれより大きく、縦は30.0㎝あったであろうと推測できる。一説によると、安土桃山時代から江戸のごく初期に、このような大型奈良絵本が作られたという。また、古い研究では天文年間（1532～1555）に大型で絵の多い美本が作られたとされる。これらのことから、当該屏風に貼られている絵は江戸初期を下ることはないといえる。また、おぜ（紙の蝶番）の様子から、屏風装にされたのは江戸末期あるいは近代か。残存状態は悪くはないが、人の顔など、胡粉が剥がれている箇所が多い。しかし、人物の手足の五指や几帳や襖の絵、人物たちの着物の模様が描き込まれ、また、着物の輪郭や模様、馬の装飾、御簾の淵が金泥で描かれており、絵そのものは良い。

『住吉物語』は、原作本が円融朝（969～984）のころの成立である。『枕草子』「物語は」段、『源氏物語』「蛍」巻に住吉物語の名がみえることから、広く読まれていたらしい。しかし、現存するのは改作本であり、これは、『無名草子』以降『風葉和歌集』以前の13世紀中に成立したとも、一条朝（10世紀～11世紀初頭）の成立だとも言われている。『住吉物語』の本文の種類は100種を越えているが、探索型継子いじめ物語という大筋は変わらない。左衛門督を兼任する中納言の宮腹の姫君が母を亡くした後、継母に疎まれて三度にわたって結婚を妨害される。危険を感じた姫君は乳母子の伝手で住吉に身を隠すが、長谷寺で姫君の居場所の夢告を受けた四位の少将に見いだされ、迎え入れられる。京に戻った姫君は家族と再会し、継母を除いた人々は繁栄する。

さて、当該屏風だが、絵のみであるためにどの系統の本文についていた絵なのか定かではなく、また、絵を貼る順番にも錯簡があるように見受けられる。なお、一つの作品では、人物によって衣が決まっていることが多いが、この屏風にある絵は、人物によって衣が定まっているわけではない。不確かな点が多いが、右に、各場面の簡単な紹介をする。

①母宮を亡くした姫君が中納言邸に引き取られ、三姉妹が揃う。（挿図１）
②四位の少将が筑前を使いにして姫君に文を書く。
③継母が謀略をめぐらし、筑前に「白袿」を渡す。（挿図２）
④少将から姫君への文を筑前が三の君に渡す。
⑤正月十日に、春の嵯峨野に出かける三姉妹の様子を四位の中将が覗く。
⑥詳細不明。あるいは、姫君が住吉に下ったのち、父中納言に文と長歌を送った場面か。
⑦四位の少将が、三の君の許で姫君の琴の音に気付く場面。
⑧姫君の許に何度も赴く少将。少将に応じているのは乳母子の侍従。
⑨継母の謀略を知らない父中納言が姫君たちと話す。
⑩姫君が妹たちにそれとなく別れを言う。
⑪（右上）少将が姫君の許を訪れる。／（左下）住吉の尼が上京する。
⑫中納言邸での尼君、姫君、侍従、乙若。
⑬姫君の出奔を知った父中納言の嘆き。
⑭少将の鞍馬参詣。
⑮姫君からの文を持ってきた童を父中納言が探させる。
⑯姫君、住吉にて箏の琴を弾く。
⑰中将となった男君、琴の音に誘われて姫君を見出す。
⑱姫君と逢った中将、お迎えの人々とともに遊覧する。（挿図３）
⑲姫君と男君の子どもたちの袴着の儀。
⑳姫君の行方を知らされていない父大納言、姫君の娘が姫君に似ていて泣く。その様子を御簾越しに見る姫君と侍従。
㉑父大納言、姫君と再会する。

挿図１　中納言邸での三姉妹


挿図２　継母、筑前に衣を渡す

挿図３　姫君と男君の遊覧

これらの中で特徴のある場面を紹介する。まず、①の場面だが、左上に書かれている姫君の頭に、烏帽子の下絵の線が見えることから、もともとは、版本絵のような、父の中納言と三姉妹という構図だったのだろう。

②③では、橙色の衣を着た男性が描かれているが、ここは、本文の異同があり、「筑前」という文使いが女性として描かれる場合と男性として描かれる場合がある。当該屏風の絵では「筑前」は男性として描かれているため、この絵とともにあったであろう本文は、古活字本系統であっただろうと考えられる。

⑥の場面は、同じ古活字本系統の本文である横型奈良絵本の『住吉物語』（日本語日本文学科所蔵）に似た場面がある。そこでは、住吉に隠れた姫君からの文を童が運び、父中納言宅にいる「半者」に渡す場面として描かれている。仮に、この絵が姫君からの文と長歌を送られる場面だとした場合、この絵は⑭と⑮の間に入るべきである。

⑱の場面のように、物語の終盤で姫君が舟に乗る構図はよく描かれる。しかし、その多くは少将と姫君とお付きの者たち、あるいは、姫君とお付きの者たちであり、ここに住吉に残ったはずの尼君が同乗しているのは不思議である。

今回、史料館所蔵の住吉物語貼交屏風は、古活字本系に近い本文であることがわかった。これらの絵をより詳細に調べ、ともにあったはずの本文の系統が確認できれば、⑥や⑱の絵の不審点も解決できるだろう。

（日本語日本文学科非常勤講師　武藤那賀子）

貝桶形流水菊花葵文ボンボニエール

個人蔵
昭和10年（1935）7月8日
径4.9cm　高5.8cm

北白川宮永久王・祥子妃（結婚式）
昭和10年（1935）4月26日

明治中期以降、皇室・華族家等の慶事の際に小さな引出物が配られる慣習が生まれた。引き出物は華やかな意匠が施された小型の工芸品で、銀製の菓子器であることが多い。ヨーロッパでは子供の誕生や結婚式等の祝事の際に砂糖菓子（ボンボン）が配られ、その砂糖菓子を入れる容器をボンボニエール（Bonbonnière）と呼ぶことから、引出物全体がいつのころからか、「ボンボニエール」と呼ばれるようになった。現代の皇室においてもボンボニエールを引出物とする慣習は続いている。

作品は北白川宮永久王・祥子妃が結婚後に初めて、大宮御所での御晩餐に招かれた際に、貞明皇后より下賜された貝桶形のボンボニエールである。貝合わせは、対となる貝以外とは組み合わせることが出来ないことから、夫婦和合の象徴となり、貝桶は婚礼調度の中で最も重要な意味を持った。文様には天皇家を表す菊と祥子妃の実家徳川家を表す葵が描かれている。ごく近しい人々のみの晩餐会であり、おそらくは数個しか制作されていないものと思われる。

北白川宮永久王は明治43年（1910）北白川宮成久王の第一王子として誕生。母は明治天皇第七皇女房子内親王。昭和6年（1931）陸軍士官学校卒業の後、陸軍砲兵少尉任官。昭和15年（1940）駐蒙軍参謀として赴任していた張家口で事故死を遂げる。31歳の若さであった。

祥子妃は大正5年（1916）男爵徳川義恕の次女として誕生。永久王に嫁ぎ、二児をもうける。永久王の薨去、さらに昭和22年（1947）の皇籍離脱と、激動の時代を生き抜いた。

（学芸員　長佐古美奈子）

学習院大学史料館からのお知らせ

平成28年度秋季特別展

君恋ふるこころ
―恋におちる日本美術―

【主催】学習院大学史料館
【共催】一般社団法人　霞会館
【協力】学習院大学文学部哲学科・日本語日本文学科
【会期・会場】
●平成28年10月1日（土）～12月10日（土）
　開室：月～土曜　10：00～17：00
　閉室：日曜・祝日、10月21日（金）・10月22日（土）
　　11月3日（木）～7日（月）
●北2号館1階　学習院大学史料館展示室
　＊入場無料
●ギャラリートーク　①10／29（土）　②11／19（土）
　＊いずれも14：00～　展示室内 事前申し込み不要

【関連講座】
第81回学習院大学史料館講座
「王朝物語と絵画」
日時：10月8日（土）14：00～15：30（開場13：00）
会場：学習院創立百周年記念会館正堂
講師：佐野みどり氏（学習院大学文学部教授・史料館研究員）
　＊入場無料　事前申し込み不要

ミュージアム・レター第32号

2016年10月1日発行
〒171-8588　東京都豊島区目白1-5-1
電話　03（5992）1173
FAX　03（5992）9219

Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館

●ホームページもご覧ください
http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua